慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	江戸の知的空間と海保青陵 : 「自由自在ノ身」の選択をめぐって
Sub Title	Kaiho Seiryo in the intellectual environment of Edo city
Author	青柳, 淳子(Aoyagi, Junko)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.103, No.3 (2010. 10) ,p.517(131)- 542(156
JaLC DOI	10.14991/001.20101001-0131
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20101001-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」103 巻 3 号（2010 年 10 月）

研究ノート

江戸の知的空間と海保青陵

——「自由自在ノ身」の選択をめぐって——[1]

青　柳　淳　子

（初稿受付 2010 年 9 月 29 日，
査読を経て掲載決定 2010 年 10 月 29 日）

はじめに
——田沼期の江戸と本稿の課題——

海保青陵（1755–1817[2]）は宝暦 5（1755）年，丹後宮津藩の江戸詰め家老，角田市左衛門青渓（1720–1789[3]）の長子として江戸で生まれ，18 世紀後半から 19 世紀にかけて活躍した江戸時代の経世家として知られている[4]。青陵が青年時代を過ごしたいわゆる田沼期は[5]，狂歌が爆発的に流行した時期である。狂歌師として活躍する人びとは幕臣，藩士，医者，旅宿屋，両替屋，商人から遊女にいたるまで様々な身分や職業であった[6]。こうした芸苑のつながりを

（1）　本稿は，博士課程学生研究支援プログラムの補助を受けて作成されたものである。

（2）　本稿に登場する主な人物には生没年を付す。その場合，特記のないものは『国史大辞典』（吉川弘文館 1979–1984 年），『国書人名辞典』（岩波書店 1993–1999 年），および八木清治「海保青陵の交遊」（『福岡女子学院大学紀要』第 1 号，1991 年 2 月）によるものである。これら以外の文献に依拠する場合は随時記載することにする。

（3）　角田青渓については名古屋市役所編『名古屋市史人物編下巻』（1981 年，p.245），および拙稿「海保青陵年譜考」（『KEIO Economic Society Discussion Paper Series』Graduate Student No.08–2，2008 年），同「研究ノート 海保青陵の伝記的考察」（『三田学会雑誌』102 巻 2 号，2009 年）を参照のこと。

（4）　海保姓は青陵の祖父の姓。祖父が角田家へ養子に入った。青陵は「稽古談」（蔵並省自編『海保青陵全集』八千代出版 1976 年所収。以下『全集』と略す。本文中の青陵著作引用文はすべてこの『全集』による）で出自を述べている。なお，本稿における海保青陵の経歴に関する記述については「稽古談」のほかに，前掲拙稿「海保青陵年譜考」（2008 年），同「研究ノート 海保青陵の伝記的考察」（2009 年）を参照のこと。

支えていた人びとが交友する場は狂歌の会だけではなく，漢詩や和文のサークルから宝合わせや博覧の会合などいくつものジャンルが存在していたという[7]。また諸大名たちも，趣味として漢詩や絵画，雅楽，茶道を嗜むものは多かった。たとえば青陵との交遊が確認できる伊勢長島藩主の増山正賢（雪斎）（1754–1819）[8]は画家としても名高く，青陵父の従兄である篠山藩主青山忠朝（1708–1760）[9]も和歌を能くした人であった。寛政の改革を主導した白河藩主松平定信も和歌や雅楽を好み，自らも書画を描き，隠居後は庭園造りに力を注ぐなど，芸苑の世界にも造詣が深かったようである[10]。

本草学や西洋の知識などが実用の学問として殖産興業策と結び付けられていくのは享保期以降であると考えられる。前野良沢の師としても知られる青木昆陽，野呂元丈は徳川吉宗からオランダ語習得の命を受け，以降蘭学，洋学研究は進歩を遂げることになる。朝鮮人参や甘藷の栽培など外国品種の国産化が提起され，享保5（1720）年，キリスト教に無関係な漢訳洋書の輸入が許可された。解剖学書『ターヘル・アナトミア』が，前野良沢，杉田玄白，桂川甫周（1754–1809）[11]らによって翻訳されたことに象徴されるように，田沼期は以前から引き継がれてきた洋学の知識が花開く時代でもあったといえるだろう[12]。オランダ商館長江戸参府の定宿になっていた日本橋本石町の長崎屋には，幕府の天文方や蘭学者たちが訪れる機会も多くあり，通詞を介して医術や

---

(5)　田沼期とは概ね宝暦年間から天明年間頃を指すようであるが，歴史研究者の見解は必ずしも一致していない。藤田覚は田沼時代の始まりを通説に従い宝暦8（1758）年からとし，その終焉を天明7（1787）年までという見解を示している（藤田覚『田沼意次』ミネルヴァ書房 2007年，「はじめに」を参照）。田沼期についてはほかに辻善之助『田沼時代』（岩波文庫 1980年），中井信彦『転換期幕藩制の研究』（塙書房 1976年）を参考にした。

(6)　戸沢行夫が示す狂歌師一覧には，江戸に居住する狂歌師50名が列挙されている（戸沢行夫『オランダ流御典医 桂川家の世界 ——江戸芸苑の気運』築地書館 1994年，pp.143–146，表3.1）。

(7)　漢詩や和文，狂歌の会合，宝合わせの会，博覧の会合など，江戸の文化人たちの集まりに関しては，揖斐高「江戸の文人サロン」（世田谷区立郷土資料館編『江戸の文人交友録』世田谷区立郷土資料館 1998年所収），同『江戸詩歌論』（汲古書院 1998年），同「社中・連中」（福田アジオ編『結社の世界史1　結衆・結社の日本史』山川出版社 2006年所収）を参考にした。

(8)　大坂より十時梅厓を藩儒に招き，天明5（1785）年，8月に藩校文礼館を創設。木村蒹葭堂との親交も厚かった。書画を能くし，南蘋風の花鳥画や山水画を描いた。雪斎については，三重県立美術館編『江戸の風流才子　増山雪斎展』（三重県立美術館 1993年），大槻幹郎『文人画の譜』（ぺりかん社 2001年，pp.261–263）を参照。享和3（1803）年に描かれた「自讃山水図」（前掲三重県立美術館編，1993年所収）に「青陵先生の需に応じて図を作る（原文漢文）」とある。

(9)　青山家と海保青陵の関係については前掲拙稿「海保青陵年譜考」所収添付資料1「青山家系譜と青陵の関係図」を参照のこと。

(10)　文化人としての松平定信に関する考察は，今橋理子『江戸絵画と文学』（東京大学出版会 1999年）を参照。またそのほかの諸大名の学芸に関しては，福井久蔵『諸大名の学術と文藝の研究』（厚生閣 1937年）によって詳細に考察されている。

(11)　桂川家の人の生没年は，「図1・5　将軍在位期間と桂川家の人びと（生没）対照表」（前掲戸沢，1994年，p.28所収）に依った。甫周と称したのは桂川家四代目国瑞と七代目国興であるが，本稿に登場するのは四代目国瑞であることを述べておく。

薬の情報が集められた。蘭学者たちやその周辺の人びとは，この機会を通じて様々な西洋の新しい知識に接することが可能であった。[13] 後述するように海保青陵も幼なじみの桂川甫周を通じて西洋の知識に触れる機会をもっていた。

このように，江戸は大名の屋敷が立ち並ぶ政治の中心地としてだけではなく，それらに付随する多くの学者や芸術家が集住する文化の中心地でもあった。そして特筆すべき点は，この大都市に集まる様々な文化人[14]たちによっていくつもの環が重なり合うようなネットワークが存在し，知的空間が創り出されていたことであろう。[15] しかし，こうしたネットワークに注目した研究が江戸時代の政治史や経済史の中で個別に取り上げられる機会は多くない。経済思想は，経済現象のみならず，政治や文化，人びとの社会通念と切り離して考えることはできない。したがって，海保青陵の経済思想にも彼の生きた時代思潮や文化動向などが反映されているはずである。この意味において，彼が過ごした江戸の知的環境全体について見渡すことは彼の思想形成過程を知る上でも重要な手掛かりになりうると考えられる。しかし海保青陵に関していえば，その個別研究の多さに比して伝記的研究が手薄いというのが現状であり，そのことが，テキストに記されている事実を把握する妨げになりかねない。したがって，伝記的研究を深化させることも重要な研究テーマであると考えている。

これまで海保青陵の社会観や人間観について考察し，[16] 先行研究で蓄積された年譜に加筆

（12） 江戸時代中期の洋学，科学技術——実学については，杉本勲『近世実学史の研究』（吉川弘文館 1962 年），沼田次郎『洋学伝来の歴史』（至文堂 1962 年）を参照した。

（13） 蘭学者たちの周辺状況については，前掲戸沢（1994 年），同『江戸がのぞいた〈西洋〉』（教育出版 1999 年），片桐一男『杉田玄白』（吉川弘文館 1994 年），城福勇『平賀源内の研究』（創元社 1976 年），芳賀徹編『杉田玄白 平賀源内 司馬江漢（日本の名著 22）』（中央公論社 1974 年），杉田玄白／野上豊一郎校註『蘭学事始』岩波文庫復刻版（一穂社 2005 年，初版 1930 年岩波文庫），杉本つとむ『江戸の阿蘭陀流医師』（早稲田大学出版部 2002 年），吉田光邦『日本科學史』（朝倉書店 1955 年）を参照した。

（14） 文化人とは「文人」と呼べる人びとかもしれないが，「文人」とは本来中国の士大夫で儒学の教養など幅広い知識を身につけた人という意味であると考えられる。そこから派生して現在では文化・芸術に造詣が深い知識人として広義に解釈される場合があるが，その概念が確定しているとはいいがたい。江戸のネットワークを支えた人びとは武士だけではなかったことを考え合わせて，本稿では芸苑の世界に親しむ知識人たちをその身分に関わらず「文化人」と把握することにしたい。「文人」の定義については中村幸彦「近世文人意識の成立」（『中村幸彦著述集第 11 巻』中央公論社 1982 年，pp.375–407）によって考察されている。

（15） 池上英子は日本の伝統文化と日本人のアイデンティティーについて，江戸時代における公私のつながりを「組み紐」になぞらえて考察している。「組み紐」を日本の交際文化の政治的起源とする池上の考察は歴史社会学の見地から細かく分析される（池上英子『美と礼節の絆』NTT 出版 2005 年）。また田中優子は，海保青陵が交遊した司馬江漢（1747–1818）や木村兼葭堂（1736–1802），そのほか同時代に活躍した戯作者大田南畝や山東京伝，蘭学者の杉田玄白，葛飾北斎，喜多川歌麿などの浮世絵画家たち，作家の滝沢馬琴や十返舎一九を挙げて，彼らの活動は連（サロン）なしではありえなかったと述べている（田中優子『江戸はネットワーク』平凡社ライブラリー 633，平凡社 2008 年）。

修正を加える作業を行ってきた。[17] その作業の延長として，本稿では青陵が江戸で過ごした時期を，儒学や芸苑の素養を学びつつ，「自由自在ノ身」[18] を選択するまでの期間と捉え，青陵の思想形成の場としての知的空間である江戸に注目したい。海保青陵の残した著述から，彼が儒者であり，文章家であり，経世家であったことを確認することができ，そしてどれもがみな海保青陵を表す正しい語といえるだろう。しかし，「何派ノ学問ニテモナシ」[19] といい切る海保青陵を一言でいうならば，自ら述べた「自由自在ノ身」という言葉が最もふさわしい表現なのではないだろうか。海保青陵の原体験としての江戸が彼に与えたものは何であったのか，文化人たちのつながりが織り成す江戸の知的空間が海保青陵に与えた影響を，以下の3点から考えることを本稿の課題としたい。

最初に，海保青陵が10歳から約12年通った松江藩儒宇佐美灊水（1710–1776）[20] の門を例に挙げて塾内部の様相を考察する。灊水は荻生徂徠晩年の高弟として知られるが，徂徠から灊水へ引き継がれた教えが青陵思想においてどのような形で存在するのかを確認したい。

次に，青陵と江戸で交遊した文化人たちとのネットワークを追跡する。青陵は生まれてから30歳まで江戸で暮らし，以降京阪地方，北陸地方を中心に遊歴生活を送る。晩年は京都に居を移して執筆活動を続けた。途中，父が没した寛政元（1789）年，母が亡くなった寛政5（1793）年，尾張藩の藩儒として享和元（1801）年から3年ほど江戸に戻っていることが確認できる。江戸で活躍した文化人たちとの交遊は，後に諸国を遊歴した海保青陵にとって有益な財産になったと考えられる。

そして最後に，家族ぐるみで付き合いのあった桂川家を通して見えてくる青陵と洋学の関連について考察する。青陵の記述には，桂川甫周から聞いた洋学の知識について述べられる部分があるが，蘭方御典医であった甫周の知識は，青陵思想にどのような影響を与えたのであろうか，青陵の記述を手掛かりにして考えることにする。

1. 宇佐美灊水門の思想状況

各藩の屋敷が立ち並ぶ江戸は，藩主の子が育てられる場でもあった。各藩では藩士や子弟を藩邸内の御前講釈や藩儒邸にある家塾へ通学させるなど，様々な教化策が講じられていたようである。[21] ここではまず江戸の学問状況を概観し，海保青陵が通った松江藩の宇佐

（16） 拙稿「海保青陵における「己」と「智」——青陵思想の愚民観をめぐって——」（『日本経済思想史研究』日本経済思想史研究会，2008年3月所収）。
（17） 前掲拙稿「海保青陵年譜考」（2008年），同「研究ノート 海保青陵の伝記的考察」（2009年）。
（18） 青陵は「其後舎弟ヲ家ノ相続人ニ立テテ，鶴ハ家ノ厄介人トイフモノニ極マリテ，而後ニ青山家ヲ辞シタレバ，先，自由自在ノ身トナレリ。」（「東驢」『全集』，p.357）と述べている。
（19） 「稽古談巻之五」『全集』，p.111。
（20） 宇佐美灊水に関する文献は多くないが，本稿での灊水に関する情報は，主に佐野正巳『松江藩学芸史の研究』（明治書院 1981年），澤井啓一の「解題・解説」（宇佐美灊水「灊水叢書」『近世儒家文集集成第14巻』ぺりかん社 1995年所収），に依拠した。

美濃水門について塾内部の様相を考察する。濃水は荻生徂徠晩年の高弟として知られているが，徂徠の系譜を引く濃水の教授内容を確認し，徂徠から濃水へ引き継がれた徂徠学の教えが海保青陵にどのような影響を及ぼしたのかを考えてみたい。

朱子学が正式に官学となるのは寛政の改革以降であるが，それ以前も湯島聖堂は学問の中心的存在であったし，いわゆる折衷学派[22]の井上金峨や細井平洲の塾は宝暦年間にはすでに門人を抱えていた。その後も冢田大峯の雄風館，山本北山の奚疑塾，亀田鵬斎の善身堂など，折衷学派として有名な学者の塾に多くの門人が集まった。本多利明の音羽塾もこの時期の塾のひとつである[23]。海保青陵は10歳の時に宇佐美濃水に入門，古文辞学を学んだ。そして青年時代は藩主の息子たちの家庭教師をしていたこともあり，日本橋檜物町に塾を開いていたこともあった。藩校については各地方の個別研究はあっても全国的にまとまった研究は少なく，特に江戸における塾に関する史料は非常に乏しい[24]。文部省報告局編纂『日本教育史資料』（以降『史資料』と略す[25]）は，現存する全国的な教育史研究の主たる資料として用いられることが多い。これは，各府県庁の学制以前の教育記録，旧藩関係の教育史料，儒者の手記，古老の口碑などについて，明治16–22（1883–1889）年に行われた全国の調査結果をまとめたものであり，各藩の江戸における様々な塾の一覧表が掲載されている[26]。この『史資料』をもとにして，「江戸藩邸内学校有り」と回答した88藩のうち，設立年が文化年間以前となっているものは25藩で，江戸藩邸内学校の開設は早いものは元禄年代に

（21） 江戸藩邸での藩学に関する役割・意義については，工藤航平「藩校研究の視角」（大石学編『近世藩制度・藩校大事典』吉川弘文館2006年所収）を参照。

（22） 東晋太郎は折衷学について，「徂徠派の衰退と共におこった自由討究の風潮に棹さし，先行諸家が夫々門戸を張って自説を絶対とするに対し，諸説の折衷の中に聖人の教を理解しようとするもの」であると述べている（東晋太郎「細井平洲の経済思想」『経済学論究』12（1），関西学院大学1958年所収）。また丸山眞男は，井上金峨・山本北山・亀田鵬斎・細井平洲・片山兼山らを折衷考証学派として挙げ，その共通点は「党派的偏異を排し諸説の採長補短を通じて中正の道を求め，広汎な考証的＝文献的渉猟によって是を裏づけて行かうとする態度」にあると述べている。そして彼らは護園の跋扈と党派的論争に反発して出現したので，アンチ・徂徠学的色彩が強いと指摘する（丸山眞男『日本政治思想史研究』東京大学出版会1999年［初版1952年］，p.145）。

（23） この時期の江戸の学問界については中村幸彦「近世後期儒学界の動向」（中村幸彦・岡田武彦校註『近世後期儒家集』日本思想大系47，岩波書店1972年所収），鈴木博雄「近世私塾の史的考察」（『横浜国立大学教育紀要』第二輯，1962年12月）を参考にした。

（24） 江戸時代の教育史を紐解く文献としては，横山達三『日本近世教育史』（同文館1904年），石川謙『近世の学校』（高陵社書店1957年），笠井助治『近世に於ける学統学派の研究 上・下』（吉川弘文館1969年）などが挙げられる。また大石学編『近世藩制・藩校大事典』（吉川弘文館2006年）は，これまでの教育史研究の成果が集約されていて有用である。江戸藩邸内の塾に関する研究は少ないが，田中克佳「江戸藩邸内学校の研究（一）」（『慶應義塾大学社会学研究科紀要』第40号1994年），名倉英三郎「江戸府内の諸学校と藩邸内学校」（『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』45巻1984年），同「江戸府内諸藩邸内学校の概況」（多賀秋五郎編『藩学史研究』巌南堂書店1986年所収）などを挙げることができる。

始まっている。各藩の江戸での教化策は，藩主の江戸出府時に有名学者を邸内に招いて側近にも聴講させる，あるいは儒臣や学識ある藩士に開塾させるといった形態をとっていた。塾の場所は各藩の江戸藩邸内，別棟に校舎を設ける，あるいは新築するなどのほかに，長屋が仮設の学問所となる場合もあったようである。藩主は子弟に学問を奨励し，時には邸外の塾に通学させることもあった[27]。後述するように，藩内外の塾生が集う松江藩の宇佐美灣水門を例に見ても，塾の門戸は広く開かれていたと考えることができるだろう。

宇佐美灣水は宝永7（1710）年，宇佐美習翁の二男として上総国夷水の長者町に生まれた。宇佐美家は富農で，灣水の父が学問好きであったらしいことは灣水の墓碑銘から確認することができる[28]。また灣水の伯母は荻生徂徠の従妹に当たり，その縁から灣水は父の勧めで享保11（1726）年，護園に入門する。その際に仲介したのは，灣水の従兄と徂徠の兄荻生春竹であったという[29]。しかし灣水の入門後わずか3年で徂徠は亡くなってしまった。その後灣水の面倒を見たのは，服部南郭とともに護園の双璧と認識されていた徂徠の高弟，三浦竹渓であった。灣水は享保13年から14年（1728–29）にかけて，徂徠の弟，荻生観を中心とした『七経孟子考文補遺』の校異に加わって竹渓とともに対校作業を行い[30]，その業積を認められて幕府から「古金七両」を与えられた。徂徠の著作に丁寧な校定を加えて出版したことは灣水の業積として知られるところである。『史資料』の松江藩に関する記述には，

（25） 初版は冨山房 1890～1892 年 全9冊と附図。1969 年に文部省編で臨川書店より複製出版。本山幸彦「解説」（文部省編『日本教育史資料』第一冊，臨川書店 1969 年）を参照。
「舊何藩學制沿革取調要目」や「舊何藩立學校取調要項」を見ると，「藩内學事上ノ諸制度 士族卒ノ子弟教育方法 平民ノ子弟教育法方 家塾寺子屋設置ノ制度」から「學校名稱 校舎所在ノ地名 沿革要畧 教則 學科學規試驗法及ヒ諸則 職名及ヒ俸祿 職員概數 生徒概數 束修謝儀ノ有無 學校經費」などに至るまで，事細かに報告項目が挙げられている。「江戸藩邸内ノ學校等ニ係ル諸件ハ本項ニ準シテ取調フヘシ」と記されているにも関わらず，各藩の江戸藩邸内学校に関わる記述は極めて少ない（『史資料』第一冊，pp.7–12）。

（26） 東京府の私塾は 123 校，寺子屋は 488 校であり，そのうち開業年が文化以前のものは私塾8校，寺子屋 22 校である（『史資料』第八冊巻二十三「私塾寺子屋表 東京府」参照）。「學科學規試驗法及ヒ諸則」には，「和學，漢學，洋學，醫學（漢洋），算法，筆道，習禮及ヒ兵學，弓，馬，槍，劍，砲術，柔術，游泳等其學校ニテ教授セシ科目ヲ列記シ……」とある。江戸時代の全体を通じて常にこれらの科目を擁していたわけではないだろうが，藩校で教えていた科目は学問だけではなく，武芸を磨く様々なジャンルにおよんでいた様子が窺える。但し，『史資料』の調査結果には欠落している地域が生じていたり，各府県によって情報量に偏りが見られたり，また明治 16 年から 22 年の調査で果たして江戸時代の全実態をどこまで反映しているのか，といった問題を有している。したがって，『史資料』を扱う場合はこの点を考慮する必要がある。前掲笠井（1969 年）「序」を参照。

（27） 前掲名倉，1984 年，1986 年。

（28） 服部元立「宇佐美灣水墓碑銘」（五弓雪窓編『事実文編三』関西大学出版 1980 年所収，p.51）に，父について「君は一に習翁と号す。性英敏，学を好む。（原文漢文）」とある。

（29） 灣水の生家と修学について，佐野正巳が詳細に考察している。特に，宇佐美家系譜は過去帳に基づいており，荻生家との関わりを明確にしている（前掲佐野，1981 年，pp.52–57）。

「松江藩　宝暦八年學館ヲ松江城下母衣町ニ創設シ桃大藏ヲ儒官トナシ以テ群臣子弟ヲ教授セシム文明館則是也此時ニ方テ江戸藩邸内ニモ亦文學所ヲ設ケ宇佐見恵助ヲシテ其事ヲ掌ラシメ東西文學稍盛ナリト云フ是ヲ藩學ノ件權輿トス」とあり[31]，海保青陵が通った宇佐美灊水の「文學所」は松江藩の江戸藩邸内に存在していたことがわかる。またそれを裏付ける史料として，灊水の門人で青陵と同年代の釈雲室（1753–1827）[32]が記した『雲室随筆』がある。そこには，灊水門内の弟子たちや塾内の雰囲気を伝える内容が記されており，青陵が父や弟と一緒に灊水門に出入りしていた様子が述べられている。以下いくつかの史料をもとにして，松江藩の宇佐美灊水門ではどのように学問を教授していたのかを考察したい。

さて学問の事，どれそれの先生はと尋れども，大都の事，町屋などの商売のみの者は一向に知らず，湯島の聖堂といへる所こそ学問する所と承る抔と申すのみなり。……此人の申は松平出羽守殿御屋敷，宇佐美恵助といへる人こそ当時高名の学者と承ると咄せしに，……早速恵助へ右之段頼込呉，恵助承知いたされ廼三郎左衛門同道にて参りたり。恵助名恵字子迪灊水と号し，徂徠翁の門人にて，其頃七十近き様にみへたり。其より日々神田久右衛門町より赤坂御門内出羽守殿屋敷迠かよひたり。然ども子迪も老先生といゝ，殊に大家の事故初入の者には教も届きかぬる事なりしが，彼是知る人の出来て，中にも角田市左衛門，名明字公熙青渓と号，其子彦市名彦字祥邦[33]と云し，其弟兵十郎名彪[34]，其外知る人も段々出来ければ[35]……

雲室については後述するが，その記述から，海保青陵が父や弟とともに灊水のもとで学んでいた様子がわかる。江戸への遊学を実現した雲室がたどり着いた先は，「高名の学者」として紹介された松江藩儒宇佐美灊水の塾であった[36]。同門，同年代の海保青陵とは以降親交が続くことになる。灊水が，常々徂徠から「学問やめよやめよと叱られ」ていたというエピソードを門人たちに話した様子や，「灊」という「むつかしそうな字」について弟子たちから質問を受けるたびに「我は上総の国夷水郡の産なり。夷水古注灊水と書せり故，是を号

（30）『七経孟子考文補遺』の対校作業を通して，灊水は竹渓から基本的手法を教え込まれたのではないか，と澤井は推測している（前掲澤井，1995 年，pp.31–40）。
（31）『史資料』第 2 冊，p.466。
（32）雲室の研究として，茅原東学「雲室論」（『中央美術』第 5 巻第 12 号，日本美術学院 1919 年所収），渡辺刀水「雲室上人」（『伝記』伝記学会 1936 年 5 月所収），高井蒼風「画僧雲室の芸術」（『信濃畸人傳』一光社 1971 年所収），相見香雨「雲室修禅余墨」（『相見香雨集二』青裳堂書店 1986 年所収）などがある。
（33）海保青陵を指していることは，「角田家系譜図」（角田家所蔵），および「青陵平先生墓　墓誌」（「角田青渓墓と梅窓院」磯ヶ谷紫江『墓碑史蹟研究』第 39 冊，後苑荘 1926 年所収）から明らかになる。
（34）青陵の弟であることは前掲「角田家系譜図」から明らかになる。
（35）釈雲室「雲室随筆」（森銑三・北川博邦編『続日本随筆大成 1』吉川弘文館 1979 年所収，pp.78–79）。
（36）雲室の出自は前掲「雲室随筆」で述べられている。佐野正巳は当時灊水の名声が高かったことを，『大東詩集』（天明 2 年刊）の記述を挙げて論証している（前掲佐野，1981 年，p.94）。

とせり」と答えていた様子など，『雲室随筆』には灌水の具体的な言動が描かれており，当時の塾内の雰囲気をつかむことができる。また灌水門に関する記述だけではなく，様々な文化人たちについても述べられていて[37]，知的空間としての当時の江戸を知る手掛かりにもなる。雲室は灌水の学風について，「其性質篤実にて師の教をかたく守り，著述も多く有之。四家寓校考を始め，古文矩，輔儲篇，王注老子同異，絶句解考證などなり。元来篤実の人故考證ずきにて，四家迫，徂徠集，皆考證有[38]。」と述べている。

> 鶴[39]十歳バカリノ時ヨリ，徂徠ノ門人宇佐美灌水ノ門ニ入リテ書ヲ読メリ。鶴二十三ノ年ニ灌水先生没セリ。灌水ノ教ヘハ秦，漢以下ノ書ヲ見ル事法度ナリ。古書バカリ注疏ヲカケテ研究スル事ナリ。ユヘニ，吾邦ノ儒先生ノ書ナド見ヌハヅナリ。鶴二十グラヒヨリ，シキリニ文章ヲカキタルニツキテ，漢・晉・唐・宋ノ文章家ノ書ヲ見タリ。ヨリテ発悟シタル事モアリ[40]。

青陵の記述から，灌水の「秦，漢以下ノ書ヲ見ル事法度」で，「古書バカリ注疏ヲカケテ研究スル」という徹底した古文辞学教授法をうかがうことができる。青陵は，「二十グラヒ」の頃から「シキリニ文章ヲカキタル」ようになり，そのために「漢・晉・唐・宋ノ文章家ノ書」を見たという。二十歳くらいになるまでは，おそらく「法度」であった「秦，漢以下ノ書」を熟読することはなかったのであろう。では，宇佐美灌水は荻生徂徠の古文辞学に対してどのような考えをもっていたのであろうか。

> 諸侯は学問の力にて領分の民を治め玉へハ莫大の功徳あり　先師徂徠経書を見るに天下國家を治むる上へかけて解す　匹夫一人の身を治むる上へかけす　聖人の道ハ天下を治むる道と見たる故なり　ここに眼の付処大に它流の学問と相違ある也　此見識を以て古書を見るに　古書の本意あらハれて古書の語を今日國を治る上へかけて大に益を得るなり　ここに至て始めて古の聖人の道の明の事成　今日の用に立つなり[41]。

灌水は，「聖人の道ハ天下を治むる道」であるという徂徠の見識が「它流の学問」との相違であると指摘し，この見地から古書を読めば，その本意を読み取ることができ，それが国を治めるために大きな利益をもたらして今の世の中に役立つのだ，と述べている。「古書の本意」を理解すれば，「古の聖人の道」が明らかになり，天下を治める事，すなわち「今日の用に立つ」というのである。こうした灌水の教えは，弟子である青陵に以下のように伝わったと考えられる。

---

(37) たとえば，諸葛監，渡辺玄対，佐野東洲，董九如，谷文晁，鏑木梅渓，鈴木芙蓉，井上金峨，沢田東江，増山雪斎，宋紫石・紫山，亀田鵬斎など，多数の人物名が挙がっている。
(38) 前掲「雲室随筆」，p.82。
(39) 青陵は著作中，自分を「鶴」と呼称する。皐鶴という号に由来するものと思われる。
(40) 「洪範談」『全集』，pp.584–585。
(41) 「勧学書」前掲「灌水叢書」，p.172。

堯・舜・禹・湯・文・武・周公ノ仕方ニテ，治世ヲ治ムレバ治マル也。然レドモ後ノ儒者ノ堯・舜以下ノ話ハ，実話ニハアラザル也。孟子ノ堯・舜以下ノ話ハ，モハヤ孟子ノ己ノガ勝手ノヨキ方ヘ引入テコシラヘタルユヘ，又チゴフ也。孔子ノ話ハ上古ヲバ引入タルコトナシ。…孟子ニ至リテハ，時ヲ救フ意甚急ナルユヘニ，針ホドノコトヲ棒ホドニ云気味アリ。タヾ愛民ヲ第一トシタル也。棄利ト云モ，愛民ト云モ，其時ヲ救フ語ニテ，治世ニ用ユベキ定木デハナキ也。故ニ乱世ヲ救フニハ，孔・孟ノ仕方ニスレバ救エル也。治世ヲ治ムル仕方ニテハナキト知ベシ。書経ト春秋内外伝ニテ，孔・孟以前ノ仕方ヲ見ルベシ。周礼以下諸子ノ語ニテ，一体治平ノ策ヲ見ルベシ。治平ノ策ヲ知テ，其後ニ孔・孟ノ其時ヲ救フ仕掛ヲミテ，其時々ヲ救方ヲ知ベキコト也。(42)

青陵は，「後ノ儒者」の「堯・舜以下」の話は「実話」ではないと述べている。たとえば，孟子が述べる「堯・舜以下」の話は，孟子が自分の時代に合うように「引入テコシラヘタル」ものなので，事実と異なっているという。「孟子ニ至リテハ，時ヲ救フ意甚急ナルユヘ」，つまり孟子の戦国時代は世を治めることが急務であったので，治政の策として，「針ホドノコト」を「棒ホドニ」誇大表現する必要があったというわけである。「孔・孟ノ仕方」はあくまでも「乱世ヲ救フ」方法であり，「治世ヲ治ムル」ためにはまず治世であった「孔・孟以前ノ仕方」を把握し，「治平ノ策」を理解したその後で，「孔・孟ノ其時ヲ救フ仕掛ヲ」見て，「其時々ヲ救方ヲ知ベキ」であると青陵は述べているのである。古書を根拠に得られる事実を発見，確認し，ひいてはそれを現実の政治に活かすことを目指そうとする青陵の姿勢は，後世の解釈に依らず，古語の真意を帰納的に研究する徂徠の教えを灊水門で培ったものと考えることができる。(43) さて，徂徠は灊水の入門後わずか3年で世を去ってしまった。灊水が教えを受けた期間はわずかであったにも関わらず，灊水の徂徠への信奉ぶりは相当厚かったようである。

学問ハ徂徠先生著述ノ書籍トモヲ玩味熟讀シ基本ヲ立ツヘシ　基本立タサレハ異論ニ惑ヒ無益ノ学問ヲシテ生涯ヲ送ル惜シムヘキ事也　基本トハ辨道辨名論語徴大学解中庸解学則ナリ　コノ六書ヲ熟讀スレハ六経始メテ明ニシテ古聖王ノ道ノ正路ヲ得ルナリ　右ノ六書ヲ讀マヌ前に六経を讀テ解シタルト右ノ六書ヲ讀テノ後ニ解スルト心得大ヒニ違フ也　是ヲ以テ見レハ六書ハ六経ニ入ルノ正路ノ手引也。(44)

灊水によれば学問の基本は「徂徠先生著述

(42)「稽古談」『全集』，p.14。
(43) 佐野正巳は宇佐美灊水の著作を詳細に考察し，その研究態度・研究方法について述べている。前掲佐野（1981年，pp.147–194）を参照。また佐野は，「灊水のてがたい考証の学風が，弟子たちに影響を及ぼさないはずはない。」と指摘し，青陵の『老子国字解』，『洪範談』などは，灊水の徹底した古文辞学の方法や訓練なしには生まれなかったすぐれた書であると評価している（同書，pp.97–98）。
(44)「雑著」前掲「灊水叢書」，p.179。

ノ書籍トモヲ玩味熟讀」することであるという。この基本が確立されなければ「異論ニ惑ヒ無益ノ学問ヲシテ生涯ヲ送ル」ことになると灊水はいう。「異論ニ惑」わされることのないように，灊水が弟子たちに求めた具体的な学問の基本は，荻生徂徠の主著である『弁道』，『弁名』，『論語徴』，『大学解』，『中庸解』，『学則』を理解することであった。徂徠の六書は，「六経ニ入ルノ正路ノ手引」であると灊水は弟子たちに伝えている。おそらく青陵も，灊水の勧めるこの六書を熟読したのであろう。また，子供への教えとして灊水は以下のように記している。

> 先ツ童児ニ句讀ヲ授ルニハ千字文孝経論語ヲ讀マシムヘシ　千字文ハ予訓点ヲ加ヘテ刊行セリ　孝経ハ春臺ノ訓点ノ古文　孝経正文論語モ春臺ノ訓点ノ論語古訓正文ヲ讀マシムヘシ　何レモ訓点ヲ精密ニシテオキタレハ句讀ヲ授ルニハ初ヨリ訓点ノ正シキ書ヲ授ルカヨケレハ右ノ書ヲ讀マシムヘシ。(45)

灊水は，子供に対してはまず正しい訓点が付けられた書を読むべきであるとして，太宰春台が付けた訓点の古文を推薦している。海保青陵の父，角田青渓は宮津藩の財政再建に貢献し，宮津藩致仕後は尾張藩で教化政策に携わった人物であるが，彼は息子を 10 歳で灊水に入門させた。三つ違いの弟も，おそらく早い時期に灊水門へ入門し，幼い兄弟はこの「訓点千字文」(46)で句読を学んだのかもしれない。

以上考察してきたように，松江藩の宇佐美灊水門では，「徂徠先生著述ノ書籍トモヲ玩味熟讀」して学問の基本を身に付け，古書から得られる事実を認識し，そこに記された治国平天下の方法を「今日の用に立つ」ようにする，つまり「聖人の道ハ天下を治むる道」であるという徂徠の教えを教授していたといえるだろう。では，灊水門の弟子たちとその周辺にはどのような人びとが集っていたのであろうか。

門人たちには青陵親子たちのほかに，松江藩士をはじめ，片山兼山，豊島豊洲，水戸藩の立原翠軒らの名前を挙げることができる。(47)片山兼山は宇佐美灊水の養子となるが，思想の対立によって後に離縁されている。(48)豊島豊洲は寛政異学の禁に反対し，「寛政の五鬼」に数えられた人物である。(49)青陵と同い年の松江藩士，園山酉山は師の没後，その高弟豊洲に師事し，桂川甫周にも教えを請うていたようである。佐野正巳は，酉山はおそらく青陵を介して桂川甫周に入門した，と述べている。酉山と甫周の関係が契機となって，桂川家は雲州

(45)「雑著」前掲「灊水叢書」，pp.175–176。
(46) 佐野の指摘によれば，文字習得の教材である「訓点千字文」刊行本の楷書は青陵の父，角田青渓によるものであるという（前掲佐野，1981 年，p.189）。
(47) 前掲佐野，1981 年，pp.84–103。前掲「雲室随筆」にも青陵父子のほかに当時の灊水門に出入りしていた門弟について述べられている。
(48) 佐野正巳は兼山の離縁について，灊水との思想の相違以外の説にも触れている（前掲佐野，1981 年，pp.125–126）。
(49) 中村幸彦「解題（一）」前掲『近世後期儒家集』所収，p.536。

松平家出入りとなり，以来桂川家と松江藩の関係は深くなっていったともいう。[50] 兼山も豊洲も折衷学派の学者として知られている。立原翠軒は水戸藩の彰考館総裁を務め，『大日本史』の編纂に携わった人で，米沢藩主，上杉鷹山の師で後に尾張藩に迎えられる細井平洲にも師事していた。細井平洲は中西淡淵に師事し，やはり折衷学派の範疇といえる。そして灌水は，平洲や同じく尾張藩の国用人を務めた人見璣邑らとも親交があった。宇佐美灌水自身は師，荻生徂徠の堅固な信奉者・祖述者であったが，灌水門周辺の人びとには折衷学派として活躍する儒者が少なからず見受けられることがわかる。また灌水の塾が藩外にも門戸を開いていたことは，松江藩以外の門人たちを受け入れていたことからも明らかになる。[51] こうした灌水門に出入りする人びとは，多少なりとも青陵父子と関わりがあったはずであろう。

最後に，灌水が信奉した荻生徂徠の学について確認しておきたい。丸山眞男は『日本政治思想史研究』の中で，治国平天下を目指す経学の方面を徂徠学の公的な側面とし，「見聞広く事実に行わたり」，「只広く何をもかをも取り入れん」とする方向をその私的側面と呼んで，この公私の分岐が徂徠学派全体を貫く根本的な性格であると述べている。[52] 公的側面の主な担い手は太宰春台であり，私的側面のすぐれた継承者は服部南郭ということになるだろう。丸山は，治国平天下の学と，詩文・歴史・考証学とが別個の人格によって追究される結果，[53] 徂徠学の理論的統一性の破壊を導き，天明頃を境として蘐園学派の思想界における主導権は急速に失われたのだという。そして，徂徠学を没落させたものは，「汗牛充棟の反徂徠学的文献でもなければ，松平定信の「寛政異学の禁」でもなく，実に蘐園自ら」とする。[54] しかし冒頭で述べたように，井上金峨，細井平洲，冢田大峯，山本北山，亀田鵬斎ら折衷学派の台頭や，西欧の学問や考え方の影響が徐々に知識人たちの間におよびつつあったというような外的要因も見過ごすことはできない。徂徠学の没落は決して学派の内的要因のみではなかったであろう。

源了圓は，18 世紀という時代——荻生徂徠以後，19 世紀のはじめに外圧の問題がおこり，知的世界の雰囲気が一変するまで——を日本の第一次啓蒙の時代と据え，杉田玄白や司馬

（50） 前掲佐野，1981 年，pp.408–409。
（51） 灌水の門人や交友については前掲佐野（1981 年）を参照のこと。
（52） 前掲丸山，1999 年，pp.102–103。
（53） 丸山眞男は，「治国平天下の学と，詩文・歴史・考証学とが別個の人格によって追究される結果」と述べるが，一人の人間がそれぞれを完全に切り離して述べられていたとはいい切れないのではないだろうか。たとえば太宰春台は『経済録』の中で，治国平天下だけではなく歴史についても言及している。春台は「凡経済ヲ論ズル者，知ルベキコト四ツ有り。一ツニハ時ヲ知ルベシ。二ツニハ理ヲ知ルベシ。三ツニハ勢ヲ知ルベシ。四ツニハ人情ヲ知ルベシ。」と述べて，「一ツニ時ヲ知ルトハ，古今ノ時ヲ知ル也。」とし，中国や日本の歴史について言及している（太宰春台『経済録』頼惟勤校注『徂徠学派』岩波書店 1972 年所収，p.20）。
（54） 前掲丸山，1999 年，pp.141–145。

江漢，山片蟠桃（1748–1821）[55]や海保青陵らを「新しいタイプの思想家」として把握する。彼らは伝統的な価値観に対して常に批判的精神をもって疑い，経験に裏づけられる合理的見地から物事を考えた，というのである[56]。海保青陵が晩年に記した『稽古談』の中で，「鶴ハ唯文章ズキニテ，何派ノ学問ナドヽイフコト大キラヒ也。ワカキトキカラ何派ノ学問ニテモナシ。即，鶴ガ一家ノ学也[57]。」と述べている。「何派ノ学問」にも属さないような儒学者たちをすべてまとめて「折衷学派」と括ってしまうのには抵抗があるが，蘭学の発展期でもあった田沼期の江戸では，仁斎や徂徠以降に芽生えた新しい学風が勃興するような環境が用意されていたと考えられるのである。もっとも，こうした「異学」の盛隆は寛政期に一変することになるが[58]，少なくとも田沼期の江戸に集住する学者たちは自由に看板を掲げて塾を開くことが可能であった。田沼期の江戸では，朱子学派や徂徠学派，折衷学派の儒学者たち，あるいは青陵のように「何派ノ学問」にも属さないという儒学者たち，こうした様々な学者たちが集まる知的空間が築かれていた。そして彼らは同時に芸苑の世界にも通じ，江戸の文化活動を担う人たちでもあったのである。

2. 江戸の文化人たちと新たな思潮

海保青陵は江戸時代後期の経世家として知られているが，同時に漢詩や唐画を嗜む文化人でもあったことは自らの記述が明らかにしている。

> 画ナド書キテ遊ブ事宜カルベシ。武術ノ外ハ書画ホド腹コナルヽ事ナシ。一枚唐紙

（55） 山片蟠桃は懐徳堂で中井竹山，履軒兄弟に学んだ朱子学者ではあるが，天文学を麻田剛立に学んでいた。両替商升屋の別家番頭として活躍した彼は，仙台藩の財政再建にも貢献したことで知られている。青陵も「升小談」，「陰陽談」，「養蘆談」（各『全集』所収）などで山片蟠桃に関する記述を多く残している。たとえば升屋について，「平右衛門（升屋本家）モ学問ズキナル男也。阿蘭陀学者也。小右衛門（蟠桃のこと）モチロン学者也。此舛平ノ家ハ，見世中ノコラズ手代デツチニ至ルマデ，書ヲ読ミテ，皆文義ナドヲ討論シテ，相互ニ輪読ナドヲシテ会読スルコトユヘニ，ヒマガナキ也。」（「陰陽談」『全集』，p.281）と記している。升屋の好学の雰囲気が窺える。

（56） 源了圓『徳川思想小史』（中公新書 2000 年，pp.117–126）を参照。青陵，江漢，玄白らの人間観については前掲拙稿「海保青陵における「己」と「智」」（2008 年）を参照のこと。

（57） 「稽古談」『全集』，p.111。

（58） 寛政 2 年，幕府から林大学頭に申達されたいわゆる寛政異学の禁は，湯島聖堂での教学を朱子学に限定するものであり，幕府がそれを民間の塾にまで強要することはなかった。このことから，寛政異学の禁は学問や思想に対する弾圧ではなかったと理解する説がある（中村幸彦「近世後期儒学界の動向」前掲『近世後期儒家集』所収，尾藤正英『日本文化論』放送大学教育振興会 1995 年など）。一方で，実際には江戸の旗本，御家人に対して異学を禁ずる結果を招いたと理解する研究もある。たとえば鈴木は，寛政 4 年以降に実施された学問吟味，素読吟味の受験資格を異学の従学者に与えなかったため，田沼期には隆盛を誇った折衷学派の亀田鵬斎や豊島豊洲など「異学」を唱える儒学者たちの私塾は衰退の一途をたどることになる，という見解を示し，異学派の塾と異学の禁発令との関連を指摘している（前掲鈴木，1962 年参照）。湯島聖堂内でも寛政異学の禁によって，人事が一掃された。その様子は，「雲室随筆」に具体的に描かれており，異学の禁前後の湯島聖堂の状況を知る手掛かりとなる。

ニ山水抔ヲ書ケバ，遠方ヘ歩行スルヨリ腹ヘリテコナルヽ也。[59]

其ヨリ越後ノ三条ト云所ニテ書ヲ講ゼシニ，三条ニ八幡アリ。其神主ニ画ヲ書テ，狩野玉元ノ門人ニナリテ玉樹トイフ人アリ。鶴ガ門人同前ニ出入ヲセリ。和画ナリシニ，唐画ヲコノミシユヘニ鶴ガ旅宿ヘ折々来レリ。[60]

実際に青陵が描いた画賛幅，書幅は，谷村一太郎編（海保青陵著）『陰陽談』，同『青陵遺編集』の冒頭に掲載されており，漢詩も数多く残っている。[61] また，石川県立歴史博物館には青陵作の画賛幅2点と書幅1点が所蔵されている。[62] 江戸で生まれ育った青陵は30歳になって初めて武蔵国を出て伊勢へ向かった。その後青陵は遊歴生活を送り，晩年は京都に落ち着くことになる。青陵や以下に紹介する知識人たちの中にも見聞を広めるために遊歴を行った者がいるが，彼らの目的には収入を得るためといういわば「出稼ぎ」的な側面もあったようである。[63] 青陵の北陸地方への遊歴スタイルも，講演や書画に対する謝礼を得る，あるいは土地の有力者から宿や物品の提供を受けるというものであったことは史料から明らかになっている。[64] また遊歴で得たコネクションは，青陵が京都に居を移してからも効果を発揮し，知人たちのネットワークや情報は青陵の執筆活動にも役に立っていた。たとえば青陵は，北陸遊歴で知り合ってから意気投合した加賀藩士の江戸出仕にあたって『東嘘（あずまのはなむけ）』を贈っている。『東嘘』は文化2（1805）年の暮れから3年の初めにかけて，京都で書かれたものであるが，そこには江戸の有職故実から風土，食にいたるまで様々なことが記されていて，江戸の情報誌ともいえる内容になっている。また何かあった時には自分の友人を訪ねるように，と江戸に居る友人たちを紹介している。ここでは『東嘘』に登場する人物，あるいはその他の文献から青陵との交流が確

（59）「東嘘」『全集』，p.370。
（60）「天王談」『全集』，p.513。
（61） 谷村一太郎編『陰陽談』（野村書店 1935 年）の冒頭の書幅，画賛幅の当時の所蔵は，それぞれ谷村氏，伊藤家となっている。また次頁に掲載されている「立山」，「石動山」と題された画賛幅の所蔵は，高岡市　發田平兵衛氏となっているが，これらの現在の所蔵については確認の必要がある。また谷村一太郎編『青陵遺編集』（國本出版社 1935 年）の冒頭には，「文殊」・「観音」・「普賢」の三つの画賛幅が掲載されている。この三幅については坂本頼之「研究ノート　青陵自画賛訳注稿」（国士舘哲学 13 号，2009 年所収）を参照のこと。『陰陽談』，『青陵遺編集』には青陵が残した漢詩も多く収録されている。
（62） 石川県立歴史博物館資料課によれば，画賛は孔子像を描いたものと水墨で竹を描いたもの，とのことである。
（63） 前掲八木（1991 年，p.94），森銑三「釧雲泉雑記」（森銑三『森銑三著作集第四巻』中央公論社 1971 年所収），渡辺刀水『渡辺刀水集 1』（日本書誌学大系 47（1），青裳堂書店 1985 年，pp.332–340）を参照。渡辺刀水は，地方の富豪たちは遊歴文人を歓迎する一方で，入れ替わり立ち代わり幾組も押しかけてくる彼らを厄介視したであろうと述べている。
（64） 青陵の北陸遊歴に関する情報は，前掲谷村編『陰陽談』，前掲八木（1991 年），前掲拙稿「海保青陵年譜考」（2008 年），同「研究ノート 海保青陵の伝記的考察」（2009 年）を参照のこと。

認できる江戸で活躍した9人の文化人を取り上げて，青陵の交遊関係と思想状況を考えることにしたい。

①釈雲室（1753–1827）は，先述した『雲室随筆』の著者で，17–8歳の頃宇佐美灊水に入門。浄土真宗の僧侶，画家，教育家として知られている。信州水内郡飯山の光蓮寺に生まれる。安永2（1771）年，江戸に出て宇佐美灊水に儒学を学び，後に林家にも出入りし，関松窓や市川寛斎らにも師事した。後に尾張藩明倫堂督学を務めることになる同郷の冢田大峯や市河鶴鳴らとも親交があった。上尾に郷学館を建立する際，市河寛斎が尽力したことなどは自ら『雲室随筆』に記している。寛政4（1792）年，芝の光明寺二十六世住職となる。山水画に長じ，漢詩を能くし，柏木如亭らと詩画の社，小不朽社を結んだ。

②市河寛斎（1749–1820）[65]は，川越藩江戸定府の用人役を勤める山瀬蘭臺の次男として江戸に生まれた。もともと市川氏の出であったが父が山瀬氏を継いだ。父の死後，山瀬新平と称していた寛斎は安永4（1775）年，27歳の時に士籍を脱し，父祖の地である上州下仁田の高橋道斎のもとに身を寄せ，市川小左衛門と称し，やがて市川を市河と書くようになり，それが姓として定着することになったという。通称は小左衛門，寛斎と号した。幼少年期は江戸で徂徠門下の大内熊耳に師事。父の死後は江戸を離れるが，28歳の時に再び江戸に出て林家に学んだ。天明7（1787）年，田沼意次の失脚の影響は湯島聖堂内にもおよび，寛斎も啓事役を辞職。後に両国矢の倉に転居して江湖詩社を開き，柏木如亭，大窪詩仏，菊池五山らを輩出するなど，江戸詩壇の中心的人物として活躍した。寛政3年，富山藩の儒官として出仕，以後二十余年その職にあった。博学才敏，特に詩に長じていた。著書に『日本詩記』，『全唐詩逸』，『北里歌』，『詩家法語』，『寛斎摘草』，『寛斎遺稿』などがある。青陵は金沢滞在時代文化3（1806）年夏，立山登頂を果たした後，金沢に戻る途中で「富山侯ノ儒者」である友人市河小左衛門と会い，立山の話に花を咲かせている。[66]

③佐野東洲（？–1814）[67]は江戸の書家。絵師，戯作者として活躍した山東京伝の弟，山東京山[68]が文化元年頃に佐野東洲の婿養子となり，鑾山佐野栄助を名のるが後に離縁されている。戯作者として活躍した山東京山は，寛政年間に青陵の旧主である篠山藩の家臣鵜飼家の養子となって篠山藩に出仕した。津田真弓は，京山が養子に入った鵜飼家の外叔母が篠山藩主青山忠高の妾掃部として五人の子をもうけ，うち二人は篠山藩主を継いだ青山忠講と青山忠裕である（忠裕は兄忠講の養子になり藩主を継いだ）と述べている。[69]青山忠高は青陵の父，角田青渓の従兄弟の子であり，青陵が青山家を

（65） 市河寛斎については，揖斐高注『市河寛斎 大窪詩仏』（江戸詩人選集第5巻，岩波書店1991年），前掲「雲室随筆」を参照。
（66） 前掲拙稿「海保青陵年譜考」（2008年），同「研究ノート　海保青陵の伝記的考察」（2009年）参照のこと。
（67） 佐野東洲については，芳賀矢一編『日本人名辞典』（大倉書店1914年）を参照。
（68） 山東京山については，津田真弓『山東京山年譜稿』（ぺりかん社2004年）を参照。

致仕した後も懇意にしていた人物である。忠高の息子二人は青陵が青年時代に家庭教師をしていた。この二人の息子を青陵は「御妾腹ノ男子」と記しているので，青陵のいう「御妾腹」とは京山の外叔母ということになろう。忠高と二人の息子たちと青陵は「格別ニ懇意」[70]であり，また佐野東洲は青陵が江戸で最も親しくしていた友人であった[71]。これらのことから，青陵は山東京山とも既知の間柄であった可能性が高いと考えられる。

④董九如（1744–1802）[72]は，江戸の画家。号は九如・廣川居士など，通称を井戸勘助という。幕府旗本の家に生まれ，西丸扈従番となった。画を宋紫石[73]に学び，後一家を成した。初め駿河台に居住，後に小石川町俎板橋へ移る。長男義八が著述を，次男雄三郎が書を能くしたことは『雲室随筆』に記されている。宋紫石の画譜である『古今画藪』のうち四君画譜（安永８年序）を，紫石の息子南白圭と共に編んだ。

⑤中江杜澂（1748–1816）[74]は京都の僧，後に還俗して中江氏と称す。あるいは近江の人という説もある。少年時代に長崎へ遊学し，清人の龔允譲に詩を学び，唐音を訳家の柳氏に学んだという。画を④董九如に学ぶ。その作品はほとんど南蘋風の花鳥画である。五適散人の号をもつ多芸の人で，画のほかに詩・書・琴・篆刻も巧みであった。篆刻は後述の⑦稲毛屋山と同様，高芙蓉[75]に学んだ。「享和癸亥（1803 年）春」，杜澂著『杜氏徴古画伝』に海保青陵が序文を寄せており，先述の③佐野東洲との交遊，この後に述べる⑥金子金陵，青陵らとの交遊がわかる[76]。『杜氏徴古画伝』とは山水画における木・石などの素材の描き方

（69） 前掲津田（2004 年，p.16，p.24，p.169）を参照。

（70） 「佐兵衛佐殿其節ハ下野守殿トテ，雁間御詰衆ノフルキ顔ナリ。御妾腹ノ男子二人アリ。伯君ハ春橘トイフテ，二男ハ今御老中，幼名久之助ト云ヘリ。両君トモニ幼少ナレバ，講書ヲシテキカスベシトイフコトニテ，鶴ハ始終サイシヨヨリ奥勤ニテ，春橘殿家督立レテ伯者守殿ト云ヘリ。鶴，格別に懇意ニテアリシ也。久之助殿モ長屋ズマヒデアリシヨリ，素読ヲモ鶴ガ授ケタリ。」（「稽古談」『全集』，pp.109–110）。

（71） 佐野東洲との交遊について，青陵は「余在東府日。最與東州左君澤善。」と記している（「杜氏徴古畫傳序」谷村一太郎編『青陵遺編集』國本出版 1935 年，p.240）。

（72） 董九如については，板橋区立美術館編『宋紫石とその時代』（板橋区立美術館 1986 年，p.101，p.113）を参照。

（73） 宋紫石については，前掲板橋区立美術館（1986 年）を参照。紫石の画業は，花鳥画を主とする一般的な南蘋派の主題領域を超えて，精緻な人物図や，実景をふまえた富岳真景図を描き，また蘭書の挿図から模写した作品もあり，迫真的描写，作域の斬新さにおいて注目すべきものがあるという。平賀源内の編纂した『物類品隲』（宝暦 13 年）の附図を担当。長崎から江戸に戻った紫石は日本橋南４丁目に住み，師弟の教育に当たるが，その隣家が蘭方医杉田玄白の住居であったといわれている。弟子には司馬江漢，董九如ら。

（74） 中江杜澂については，三村竹清「五適先生杜澂伝」，同「五適先生琴伝説」（森銑三監修『三村竹清集 5』日本書誌学大系 23（5），1983 年所収），中田勇次郎「日本篆刻史」（中田勇次郎編『日本の篆刻』二玄社 1966 年所収，p.127），中井敬所（水田紀久訓読校注）「日本印人伝」（前掲中田編，1996 年所収，p.282）を参照。「五適先生杜澂伝」には，『杜氏徴古画伝』に青陵が寄せた序文についても言及されている。

や構図の取り方などを教授するものであるという。[77] 杜澂が天明2（1782）年9月に記した「琴伝ノ説」に，明和の末頃（1771年頃か），母と共に江戸に出たこと，安永10（1781）年に江戸で火災に遭ったことなどが記されている。江戸に出た頃の様子は，「徂徠学ノ余風尚行レテ，何事ニテモ，文事ニヨル事ハ皆，萱園，ヲ宗トセシカ，萱園ノ諸人，華音ヲ学ヒタガル人多シ……」と記している。[78]

⑥金子金陵（？–1817）[79] は江戸の画家。谷文晁または宋紫山（宋紫石の子）の門人と伝えられる。殊に花鳥を能くした。椿椿山，渡辺崋山の師として知られる。青陵は「小川町ノ雉子橋通ニ大森泰三郎トイフ六千石トル御旗本アリ。其家来ノ隠居ニ兼子允圭トイフモノアリ。金陵山人トイフテ花鳥家也。今江戸ニテハ花鳥ハ此金陵ガヨフカク也。御屋敷ヨリハ格別遠クハナシ。江戸デハ近所トイフ部也。此金陵至極面白キ男ニテ大陽気モノ也。年ハ鶴ニ一ツ上ヘナレ共，ワカフ見ル男也。」[80] と記している。

⑦稲毛屋山（1755–1822）[81] は江戸の篆刻家。通称は官右衛門，屋山・息斎と号した。高松藩世臣の次男として生まれる。幼少より病気がちで士籍を免ぜられた。10代で京都に遊歴，皆川淇園に学ぶ。京都では池大雅，円山応挙，長澤蘆雪らと交遊があった。屋山は若くして金石文字を好み，鉄筆を善くしたが，この評判を栗山が聞き，友人である高芙蓉に刀法を学ばせたという。その後屋山は芙蓉に大変かわいがられ，芙蓉は臨終の際に，屋山に後を託したらしい。屋山のほかに芙蓉門下からは葛子琴，曾之唯，源惟良，浜村蔵六らの印人を輩出している。江戸では谷文晁，山本北山，亀田鵬斎，菊地五山らと親交があった。著書には，当代詩人194名の詩を収録した詩集，『采風集』[82] や『稲毛屋山贈印記』等がある。青陵は「天神ノ男坂ノ下ノ御旗本ノ長屋ヲカリテ居ル男ニ，稲毛官右衛門トイフ人アリ。印章ホリ也。屋山ト号シテ讃州高松ノ生レノ男也。コレモ真ノ浪人ナレバ，折々ハ是等ヲ呼ビテ，気の鬱セヌ心ノ屈セヌ養ヒヲスル事第

（75） 高芙蓉（1722–1784）は甲斐高梨の人で，富士山にちなんで芙蓉と号した。若くして京都に赴き，後に京都に住んだ。学識に秀で，書画，篆刻を能くした。特に篆刻にすぐれ，今体に対して，古体に復帰すべきであると唱えた第一人者で，篆刻において近世古体派の大きな時期を画した。配は奥田氏，来禽と号して花鳥画を能くした。もともと伊藤東所の下女であったが，書画の才能がある来禽を芙蓉が見染めたらしい。前掲中田「日本篆刻史」（前掲中田編，1996年，pp.132–138），水田紀久「高芙蓉とその一派」（前掲中田編，1996年），前掲中井「日本印人伝」（前掲中田編，1996年，pp.281–282）を参照。

（76） 前掲「杜氏徴古畫傳序」を参照。

（77） 前掲八木（1991年，p.83）を参照。

（78） 前掲三村「五適先生琴伝説」を参照。

（79） 金子金陵に関しては，武田光一『日本の南画』（世界美術双書008，東信堂2000年，p.113）を参照。『国史大辞典』では生年不詳となっているが，青陵の記述によれば1754年生まれとなるか。

（80） 「東贐」『全集』，p.380。

（81） 稲毛屋山については，前掲中田「日本篆刻史」（前掲中田編，1996年，pp.135–136），前掲中井「日本印人伝」（前掲中田編，1996年，pp.291–292），前掲水田「高芙蓉とその一派」（前掲中田編，1996年，p.165），福家惣衛『讃岐人物傳』（香川新報社1914年，p.788）を参照。

一也。[83]」と記している。「日本印人伝」には「不忍池畔に住し，燕々居という。」とあるが「天神ノ男坂ノ下」という青陵の記述と一致する。[84] 屋山の息子は②市河寛斎の長子，市河米庵の養子となった市河恭斎である。[85]

⑧釧雲泉（1759–1811）[86] は南画家。通称は文平，雲泉と号した。肥前島原の人。幼少時，父に従って長崎に遊び，華人について学を修め，華音（中国語）を習った。絵画もこの時期に華人から学んだものと思われる。父の死後，一人で本州の土を踏み，山陽地方や紀州にも遊んだ。次いで四国讃岐に渡り，さらに京阪地方へと旅を続けて多年滞在し，木村蒹葭堂・十時梅厓・浦上春琴・頼山陽らと親交があった。後に江戸へ出て亀田鵬斎・大窪詩仏・菊地五山・稲毛屋山・増山雪斎・谷文晁らと親しくしたが，晩年は越後に移り住んだ。山水に最も優れていたという。木村蒹葭堂の日記から，寛政3年頃には江戸に住んでいたことがわかる。[87] 青陵は「天沢寺ト云フ。天沢東ハヂキニ湯島天神ノ裏門也。此裏門前ニ釧文平トイフ唐画カキアリ。雲泉山人トイフ肥前ノ島原ノ生レモノ也。真ニ浪人也。甚面白キ人物ニテ，書モヨク読ミテ道具家ノ好事家也。山水ハ大名人也。[88]」と記している。

⑨司馬江漢（1747–1818）[89] は江戸時代後期の洋風画家，蘭学者。安藤氏の子として江戸に生まれる。40歳余で土田氏に入夫，後に唐風に姓を司馬に改めた。号は無言道人，春波楼，西洋道人など。海保青陵とは書簡を交わすなどの交遊があった。[90] 江漢は青陵を「蘭説窮理を以テ支那の書を訳シ，談話おもしろき人」と評している。[91] 始め狩野派に学んだが，後に「和画は俗なり」と宋紫石に学ぶ。[92] 安永から天明

（82） 稲毛屋山の『采風集』は文化5（1808）年に刊行されたものである。揖斐高によれば，詩壇において山本北山が提唱した性霊派が流行すると，漢詩の大衆化が伸展し，それに伴って当代詩人の作品を集成した総集の出版が盛んになったという。漢詩の大衆化が進んだ近世後期の詩壇では，当代の詩と詩人に関する情報の流通，その整理や評価を行う批評のメディアが求められた。前掲揖斐，『江戸詩歌論』（1998年，p.34，p.491）を参照。

（83） 「東曊」『全集』，p.370。

（84） なお，文化12（1815）年の『江戸当時諸家人名録』によれば，「江戸下谷加藤侯辻番横町に住す」と記載されているようである。前掲「日本印人伝」（前掲中田編，1996年，p.292）を参照。

（85） 前掲「日本印人伝」（前掲中田編，1996年，p.294），市河恭斎の項目参照。

（86） 釧雲泉については，前掲「釧雲泉雑記」，飯島勇編『日本の美術第4号』（東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館監修，至文堂1966年，pp.117–118），大槻幹郎『文人画の譜』（ぺりかん社2001年，p.264，pp.270–272）を参照。

（87） 寛政3（1791）年，三月廿二日の欄に「肥前島原ノ人　江戸住　久代文平　十時氏状ニテ始来　備中ニ下リ候由　江戸ニ住ス」とあり，十時梅厓の紹介状をもって初めて蒹葭堂を訪れたことがわかる（木村蒹葭堂／水田紀久編『蒹葭堂日記 翻刻編』蒹葭堂日記刊行会1972年，p.304）。

（88） 「東曊」『全集』，p.370。

（89） 司馬江漢については，前掲板橋区立美術館（1986年，pp.100–101）を参照。

（90） 海保青陵と司馬江漢の間で書簡が交わされたことは，以下の論文で明らかになっている。中島次郎「司馬江漢の海保青陵宛書簡について」（『文学研究論集 文学・史学・地理学（17）』明治大学大学院，2002年所収），中野好夫「司馬江漢考（14）」（『新潮』1982年11月号所収），中野好夫「司馬江漢考（15）」（『新潮』1982年12月号所収）。

（91） 司馬江漢「無言道人筆記」（『司馬江漢全集第二巻』八坂書房1993年所収，p.137）。

にかけての時期，江漢は宋紫石風の作品を多く手掛けたと考えられる。紫石を通じて平賀源内を知り，さらに秋田蘭画の小田野直武・佐竹曙山にも近づいた。こうして天明年間，西洋画の研究が始まり，前野良沢・大槻玄沢らの助力を得て蘭書の記事などを手掛かりにし，銅版画の制作に成功，「三囲図」「両国橋図」「御茶水図」などが銅版画で描かれた。また天明末期から寛政期にかけて，臘画と称する独特の油絵を盛んに描いた。天明の末から寛政にかけて長崎に遊学，それを機に西洋理学への関心を高め，以後天文学・地理学についての著作が多くなった。桂川甫周の弟，森島中良とも親交があった。晩年は老荘思想に親しんだという。

以上，海保青陵と交遊を結んだ文化人たちの学問的素養を見ると，朱子学，徂徠学，蘭学や仏教，中国語など多岐にわたっており，青陵の周りにはひとつの学派にとらわれることなく多様な知識を身に付けていた人たちがいたことがわかる。また，それぞれの経歴や交友関係を見ると，江戸の詩壇や画壇との関わりも見て取れる。そして彼らの作品傾向には新しい思潮が生じつつあることが浮かび上がってくるのであるが，まず当時の江戸詩壇の様子から確認していこう。

揖斐高は，「天明3（1783）年に山本北山が『作詩志彀』を出版して以後，古文辞格調派と呼ばれる従来の擬古的な詩風が否定され，新たに清新性霊派と呼ばれる現実主義的な詩風が声高に提唱され始めていた」とし，「市河寛斎[93]の江湖詩社はこうした詩壇の転換期に結成されて，柏木如亭，大窪詩仏，菊池五山，小島梅外など10代から20代の新進気鋭の詩人を擁して，江戸詩壇を革新する牽引となった。」と述べている。また，本来一体であった漢詩の創作と儒学の修得が別々に切り離して考えられるようになり，漢詩だけを作って楽しむ集まりがやがて詩社というかたちに成長したともいう[94]。山本北山は，先にも述べた豊島豊洲，冢田大峯，市川鶴鳴，亀田鵬斎らとともに「寛政の五鬼」と呼ばれた[95]。青陵と親しかった市河寛斎や釈雲室も，新しい作風である現実主義的な詩風を支持して江戸詩壇の牽引車としての役割を担った人たちであったといえる。

一方同じ頃の江戸画壇では，江戸南蘋派と呼ばれる画家たちが活躍した。南蘋派とは，享保16（1731）年，長崎に渡来した清人沈南

（92） 江漢は幼少期から画に親しんだようで，その履歴や自分の生い立ちについては『春波楼筆記』に記している（日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第1期2，吉川弘文館1975年所収）。

（93） 寛政11（1799）年，市河寛斎が51歳の時に詠んだ「青陵至京師」と題する漢詩がある（「相値歯疎頭禿後　十年世味話甜酸　女児聞有京華客　半下蘆簾偸眼看」前掲揖斐，1991年，p.108）。10年ぶりに青陵と再会した場面が詠われている。

（94） 前掲揖斐「江戸の文人サロン」（1998年），同『江戸詩歌論』（1998年），同「社中・連中」（2006年）を参照。詩社に固有の名称がつけられた早い時期のものとして，享保10（1725）年，荻生徂徠とともに柳沢吉保に仕えた儒者，田中桐江によって摂津池田に結成された呉江社がある。18世紀後半になると，京都・大坂・江戸の三都だけではなく，地方にも詩社が結成されるようになった。江戸の詩社は明和年間の安達清河による市隠堂が初期のものであるという。前掲揖斐，2006年，p.112。

（95） 前掲『近世後期儒家集』，p.536。

蘋の画風を意味する。南蘋派は近世清朝画壇の，中西（中国と西洋）折衷様式の流れを受けた写実的な花鳥画体で，当時新たな写実表現を模索しつつあった江戸時代後期の画壇に大きな影響を与えるものとなった。

南蘋派は上方にも伝わるが，上方ではもともと伝統的な狩野派などの画風が根強かったため，南蘋派という独自の流派としては興隆が見られなかったようである。一方江戸では文化的伝統が弱く，南蘋派は抵抗なく受け入れられやすかったらしい。その後南蘋派は江戸南蘋派として定着し，幕末に至るまで江戸画壇写実派の主要な勢力として存在したという。(96) 青陵と交遊した董九如，中江杜瀛，金子金陵，司馬江漢らもこの中国と西洋の折衷様式の流れを受けた写実的な表現方法である南蘋派を学んだ画家であった。さらに，この新しい作風傾向に関心を示した人たちのネットワークが洋学の関心とも無関係ではなかったことにも注目しておきたい。

長崎で南蘋派を学んだ宋紫石が江戸にもどったのは宝暦 10 年前後と考えられ，紫石は日本橋南で子弟の教育にあたった。青陵と親交のあった董九如や司馬江漢は宋紫石に師事したというので，おそらくそこへ通ったのであろう。その隣家は杉田玄白邸であったらしい。紫石は杉田玄白を通じて平賀源内を知った可能性があり，源内編纂の『物類品隲』の附図を担当することになる。(97) 司馬江漢は狩野派を学んだのち宋紫石に学んだのであるが，当時の画壇について以下のように述べている。「吾国画家あり。土佐派，狩野派，近来唐画家あり。此富士を写す事を知らず。探幽富士の画多し，少しも富士に似ず，只筆意勢を以てするのみ，又唐画とて，日本の名山勝景を図する事能はず，名も無き山を画きて，山水と称す。唐の何と云ふ景色，何といふ名山と云ふにもあらず，筆にまかせておもしろき様に，山と水を描きたる者なり。是は夢を画きたると同じ事なり。是は見る人も，描く人も，一向理のわからぬと云ふ者ならずや。」(98)。この記述には，「和画は俗なり」として，より写実的な画法に魅かれた江漢の意が表れているのではないだろうか。彼は後に蘭学者たちの知恵を借りて西洋画や銅版画を作成し，それを契機に西洋理学への関心をもつようになる。先に述べたように，江漢は青陵について「蘭説窮理を以テ支那の書を訳シ」と評していた。このことからわかるように，海保青陵も少なからず西欧の知識や文化に触れる機会をもっていたことは明らかであろう。ここで紹介した多彩な 9 人の文化人たちと交遊し，また自らも江戸の文化活動を担った海保青陵であるが，次項では彼が西洋の知識を得るきっかけとなった，蘭方御殿医の名門である桂川家との交流について考察することにしたい。

（96） 江戸画壇については，前掲板橋区立美術館（1986 年），前掲飯島（1966 年），前掲武田（2000 年）を参照。
（97） 宋紫石の周辺については，前掲板橋区立美術館（1986 年）を参照。
（98） 前掲『春波楼筆記』，p.30。

3. 桂川家三代との交流と西欧の知識

海保青陵にとって開かれた西洋の窓は桂川家であったと考えられる。青陵は16–7歳の頃，桂川甫三（1730–1783）宅に寄留していた。この時期は甫三の長子，甫周が翻訳事業に携わった時期と多少なりとも重なっていたのではないだろうか。また甫周は青陵の父から経学の手ほどきを受けるなど，角田家と桂川家が家族ぐるみで交流していたことは，以下の青陵の記述からうかがうことができる。

> 鶴幼少ノ時ニ桂川甫周ト云フ御医者ト兄弟同前ニ育チタリ。コノ甫周ノ祖父甫筑トイフ人ヨリ甫三トイフ人，凡ソ三代ノ内鶴別懇ナリ。甫周ハ鶴ガ父ノ門人ナリ。鶴ヨリハ年ノ一ツモ多シ。大才子也。鶴十六七ノ時ニハ桂川ニ居タリ……鶴ハ才気鈍才モノナレバ，甫周ノヨフナル鋭キ才気ノ人ニハ毎々敗北シタリ。凡ソ天下ニ才子モ多キモノナレ共，桂川甫周・堀本一甫ト云フ両人ホドノ才子ハ，鶴外ニ見タル事ナシ。此両人トモニ鶴ガ父ノ門人ユヘ，両人トモニ鶴ガ竹馬ノ友ナリ。二人共只今ハ法眼ニテ奥医師ナリ。扨，イツモイツモ出来ル人々ニテ，鶴ノヨフニ埒ノアカヌ人ニアラズ。只平生此二人ニイジメラレテ困シミシナリ。(99)

桂川甫周の祖父，甫筑（1697–1781）は，享保20（1735）年39歳の時に奥医師に列せられた。幼少より賢く，学問を好み経書を能くし，オランダ流医道にも熱心に取り組んだという。9代将軍家重に仕えた甫筑は奥医師の中でも信頼が厚く，その博識ぶりは世間でも評判であった。また多分野にわたる知的素養に優れていたという。甫周の父，甫三は宝暦10（1760）年，31歳の時に奥医師に列せられた。墓碑によれば，甫筑同様に漢詩や和歌俳諧を能くし，ことに篆刻は優れており，10代将軍家治の落款数種を作成するほどであったらしい。また甫三は，博識多彩な平賀源内とも親交が深かった。甫三の長子，甫周は宝暦4（1754）年生まれ，『解体新書』の翻訳事業には最年少者として終始参加，協力した。甫周はオランダ商館長江戸参府の折には毎回会談し，ツンベルグの『日本紀行』にもその名が登場する。安永6（1777）年，24歳で幕府奥医師となった。林子平とは弟共々親交があり，子平の『三国通覧図説』には序文を寄せている。また十八大通の一人に数えられた通人としても知られる。弟の森島中良（1756–1810）は江戸時代中期の蘭学者，戯作者。森島中良は本名，後に桂川甫斎，戯作名は森羅万象など。狂歌名は竹杖為軽。蘭学者として『紅毛雑話』，『万国新話』ほか，地理書や語学書を著した。寛政4（1792）年から松平定信に禄士したが，同9年に辞職。戯作は父，甫三とも親交があった風来山人（平賀源内）に師事し，青陵と親交があった司馬江漢とも交遊した。以上のように青陵と親交があった桂川家三代の人びとは，医学だけではなく文芸においても素養があり，多方面に優れた知識を身

(99)「天王談」『全集』，pp.511–513。

に付けていた文化人であったことがわかる。[100]

海保青陵には三つ違いの弟がおり，上記引用文からは「兄弟同前」に育った甫周兄弟と青陵兄弟が甫周のいとこである堀本一甫を交えて顔を合わせる機会も多かったであろうと推測できる。戸沢によれば，堀本一甫は歯科の奥医師であったという。[101] そして青陵にとって，甫周たちは単なる幼なじみではなかった点に注目したい。青陵は「此二人ニイジメラレテ困シミシナリ」と表現しているが，「埒ノアカヌ」自分とは違った「才子」たちから論駁され，幼少より知的刺激を受けていた様子を読み取ることができる。また青陵がヨーロッパをはじめとする海外の情報を「大才子」[102] 甫周から得ていたことは以下の記述から確認できる。

其後ニ仏書ヲ見ルニ，釈子ハ四大種トワケタリ。大種トイフモ，洪範トイフモ同ジ事ナリ。ヤハリ物ノ理ヲ推ス手ガヽリノ大法ナリ。其後ニ桂川氏ニキケルハ，欧駱州ノ大法アリ。四元行トイフヨシ。元行トイフモ，洪範トイフモ同ジ事ナリ。老子ハ天・地・人・道トイフ。釈氏ハ地・水・火・風トイフ。地ハ中ナリ。火ハ上ナリ。水ハ下ナリ。風ハ彼飛行ノ者ナリ。欧駱ハ水・火・土・気ト云フ。コヽニテ五行トイフ事ヲ解シタリ。五行トイフユヘニシレニクキナリ。五行モヤハリ水・火・土・気ナリ。気ヲ二ツニワリテ，陰ト陽トワケタルユヘ五ツトナレリ。[103]

欧駱ニテハ，国ニヨリテ四元行ヲ甚大切ニ立ル所多キ由，西土ナドニテハ五行ノアリガタキ事ヲサヘ知ラズ。印度ニテモ四大種ヲ重ズル事ヲ，国中ヘ知ラスルデモナキト見ユルナリ。欧駱ノ内ニハ四元行ヲ今日ノ用ニ立テルヨフニシタル所アル由，桂川氏ノ物語ナリ。至極ニヨキ工夫ナリ。[104]

ヨーロッパの四元行と仏教の四大種，さらに老子や儒教の陰陽五行説を比較，理解しようとする青陵の思索は興味深い。「五行ノアリガタキ事」さえ知らない「西土」や，「四大種ヲ重ズル事ヲ，国中ヘ知ラスル」様子が見えない「印度」に比べ，「欧駱」では「国ニヨリテ四元行ヲ甚大切ニ立ル所」が多く，「四元行ヲ今日ノ用ニ立テルヨフニシタル」のは「至極ニヨキ工夫」であると青陵は述べている。甫周の言う「四元行ヲ今日ノ用ニ立テルヨフニシタル」国がどこを指しているのか，「四元行ヲ今日ノ用ニ立テル」ことが具体的に何であるのかについてはこの記述のみではわかりかねるが，おそらく，ヨーロッパの自然科学の

(100) 桂川家の人びとに関する情報は，前掲戸沢（1994 年，1999 年）に依拠した。
(101) 戸沢によれば，甫周の祖父甫筑国華の長女が一甫の母という。前掲戸沢，1994 年，p.39。
(102) 甫周の「大才子」ぶりは杉田玄白も『蘭学事始』の中で次のように述べている。「桂川甫周君は，天性穎敏，逸群の才にてありしゆへ，彼文辭章句を領解し給ふ事も萬端人より早く，未だ弱齢とは申せ，社中にても末頼母敷芳しとて賞嘆したりき。」（前掲杉田・野上，2005 年，p.61），「甫周君は抜群の俊才ゆへ，凡そ和蘭の事にも略通し，其名聲四方へ走らせ，……」（同書，p.78）。
(103)「洪範談」『全集』，p.588。
(104)「洪範談」『全集』，p.609。

知識を「今日ノ用ニ立」てるような実用の学問として青陵が評価していたものと解釈することができる。また青陵が天文に関する知識をもっていたことも次の引用文から明らかになる。

> 天ハ地球ノ外ノ空ナル所ヲ指テイヒタル名ナリ。震旦ハ地球ノ中ニテハ万分一ノ所也。天帝ガ地球万分一ノ国ノ君ガ賢ヲ尊ビ民ヲ愛スルユヘ，是ヲ贔屓ニ思召テ，水旱ヲタラヌト云フ理ハ万々ナキ事也。其上ニ水ハ地ヨリ蒸出スモノナリ。雨モ雲モ風モ皆地ヨリ出ルモノナリ。……日食ハ日月ノ交会也。不思議ナル事モ，変ナル事モナシ。(105)

「震旦」とは古代中国の異称である。青陵は，「震旦ハ地球ノ中ニテハ万分一ノ所」であって，「天帝ガ地球万分一ノ国ノ君ガ賢ヲ尊ビ民ヲ愛スルユヘ，是ヲ贔屓ニ思召テ，水旱ヲタラヌト云フ理ハ万々ナキ事」であると述べて，儒学的世界観である天人相関説を否定している。天とは「地球ノ外ノ空ナル所」のことであること，洪水や干ばつは君がもたらすものではなく，気象の諸現象によるものであること，日食は太陽と月の重なりによるもので「不思議ナル事」でも「変ナル事」でもない，という青陵の受け止め方は，中国の古典に依拠するものでないことは明らかであろう。青陵と親交があった司馬江漢は『地球全図略説』や『和蘭天説』などで，日食や月食のしくみ，コペルニクスの説など西洋理学に関する書を著している。(106) 青陵には親交のあった江漢の書を読む機会もあったのかもしれない。彼らのように，多少なりとも蘭学の知識を有していた知識人たちが，自然界の運行がもはや思弁的な現象ではないと理解していたことには重要な意味があるだろう。

以下に見る桂川家での出来事は，青陵が「蘭説窮理」で「支那の書」を訳す方法を発見するきっかけとなったと考えられる。青陵の著した『天王談』には桂川家寄留時代のエピソードが記されており，甫周に出された難問に対して青陵が思考を重ねる姿が描かれている。その内容は，刀の目貫と茶杓の鑑定をめぐって二人の間に交わされた議論の顛末であるが，青陵は甫周に突きつけられた問に対して的を射た答が見いだせず，甫周から「儒者ハ皆馬鹿ナリ。コノ理ワカラヌヨフニテ，国家ノ政事ナド講ズルハヲカシキ事ナリ。」といわれてしまう。青陵は甫周の論に歯が立たなかったのであるが，その後再考して甫周にその内容を述べ伝えたところ，「足下ハ年ヲ重ネテ学問シタルナラバ，馬鹿ノ病ナヲルベシ」と，甫周も青陵の論理内容を認めたということがあった。

思考方法の未熟さを指摘された若き日の苦い思い出は，青陵にとってよほど衝撃的な出来事であったのだろう。以下の引用文は，鑑定をめぐる議論の続きの記述である。『天王談』は青陵が51–2歳の頃の作品と考えられるが，10代の時に交わした甫周とのやりとりを忘れることができない青陵は，「今以テ馬鹿ノ病」

---

(105)「燮理談」『全集』，p.450。

(106)『司馬江漢全集第三巻』（八坂書房 1994年）は啓蒙・窮理編となっており，「地球全図略説」や「和蘭天説」など西洋理学に関する江漢の著作が収められている。

が治ったわけではないが，と前置きをしつつ思考方法のあるべき姿を記している。

左レ共鶴，今以テ馬鹿ノ病ナヲラズ。左レ共合点ノユカヌ事ヲ合点ユキタル面ヲスル事ハ，今以テ鶴ニハ出来ヌナリ。合点ユカヌ事ハドコマデモ合点ユカズ。雪ハ六角ニテ水晶モ六角也。塩ハ四角ニテ礬ノ類ハミナ四角ナリ。天ノ数ハ六，地ノ数ハ四ナリト云フ人ハ鶴ハキラヒナリ。ナゼニ六角，ナゼニ四角ト取タカ，見タカノ理ナキウチハ，底ズメハセヌ也。……推ス事足ラヌ事ハ百モ千モアルナリ。聖人ニ非ルヨリハ推ス事詳ナラズ。ユヘニ知ニクキ事アリ。造化ノ妙ハ些細ナル詳密ナル事ナレバ，推シ窮メヌ事沢山アリ。唯，中ズマシニ済シテオク人ハ鶴大キラヒナリ。中ズマシニ済シテオクユエニ，祭祀ヲスレバ福来ル，仁義ヲスレバ国治マルト云フ。祭祀ヲシテ福ノ来ルワケハケ様ケ様也。仁義ヲスレバ国ノ治マルワケハケ様ケ様トワケヲ言タキ事ナリ。ワケヲ言タラバ今ノ世ニ井田ヲシ庠序ヲ建テ，今ノ世日本ノ人今ノ風俗ニシツクリト，合フ事ヤ合ハヌ事ハ知ベシ。(107)

「雪ハ六角ニテ水晶モ六角」，「塩ハ四角ニテ礬ノ類ハミナ四角」という知識を青陵が有していたことを知る内容であるが，さらに重要な点は，未知なものを追究して行こうという青陵の積極的な姿勢が表れていることにある。青陵は「考證ずき」であった宇佐美灊水のもとで中国の古典に記されている事実を客観的に把握する訓練を積み，古文辞から得た治国の方法を現実の社会に役立てることを模索した。こうした徂徠学の実証主義面を受け継いだ青陵は，さらに徂徠が踏み込むことを避けた，自然界の未知なるものをも突き詰めていこうとする姿勢を示したのである。

青陵は同じく『天王談』で，「合点ユカヌ処ハ何ベン何ベンモ対サセテ見ル事宜シキナリ。……問ヒツメテ責メツケテ，理ニ合フ合ハヌト分別スベキ事也。」(108)と，述べている。彼はおそらく，最先端の蘭学の知識と論理を操る甫周に太刀打ちするために，「何ベン何ベンモ対サセテ」，「問ヒツメテ責メツケテ」考えることを習得したのだろう。「些細」で「詳密」な「造化ノ妙」には「推シ窮メヌ事」がたくさんあるが，決して「中ズマシニ済シ」にはせず，「ナゼニ六角，ナゼニ四角」なのか，というように自然界の法則をも理解しようとする青陵の「造化ノ妙」への追究は，天を「得て測るべからざる者」(109)とした徂徠学からは出現しえない思考態度であるといえる。

「祭祀ヲスレバ福来ル，仁義ヲスレバ国治マル」といった妄信を排し，「ナゼ」そうなるのかその「ワケ」を知る＝「底ズメ」を試みようとする青陵の知的追究姿勢の対象は，荻生徂徠が示した人事の世界から出発し，さらに徂徠が避けた自然界にも及んでいったと考え

(107)「天王談」『全集』，p.512。
(108)「天王談」『全集』，p.516。
(109) 徂徠は，「ああ，天はあに人の心のごとくならんや。けだし天なる者は，得て測るべからざる者なり。」として自然の法則を不可知として遠ざけた（荻生徂徠『弁名』吉川幸次郎，丸山眞男，西田太一郎，辻達也校注『荻生徂徠 日本思想体系 36』岩波書店 1973 年所収，p.121）。

られる。この自然界への知的追究姿勢は，西欧の知識を学んでいた桂川家周辺の人たちの影響なくして青陵の思考に姿を現すことはなかったのではないだろうか。

おわりに

海保青陵が青年期を過ごした天明期の江戸では，様々な人びとが洒落や風刺をこめた独特の名前を名乗って狂歌を詠むグループが多く結成された。諸大名も書画や茶道など芸苑の世界に通ずる者は多く，こうした多様な文化人たちが集まる江戸には大小様々なネットワークの環が存在し，一部は重なり，また一部は他の環と交錯しつつ，複雑なネットワーク空間を創り出していたと考えられる。田沼期の江戸は，大名が集住する政治の中心地というだけではなく，人びとの社交の場がいくつも存在するような文化の中心地でもあった。こうした知的空間としての江戸が海保青陵に与えたものは，ひとつは思想形成の場であり，もうひとつはネットワーク形成の場であったといえるだろう。

海保青陵は江戸で生まれ，10 歳から約 12 年間，荻生徂徠晩年の高弟，宇佐美灊水のもとで古文辞学を学んだ。灊水が教えた学問の基本は「徂徠先生著述ノ書籍トモヲ玩味熟讀」することであったが，それは単に「先師徂徠経書」を熟読することではなかった。「先師徂徠」の学問と「它流の学問」との違いは，「聖人の道ハ天下を治むる道と見たる」という捉え方にあった。灊水は弟子たちに，「秦，漢以下ノ書ヲ見ル事」を「法度」にし，「古書バカリ注疏ヲカケテ研究」することを求め，古書に記されている事実を客観的に把握させた。そしてそこから得られる治国平天下の方法を，実際の社会に役立てようとする，すなわち「聖人の道ハ天下を治むる道」とした徂徠の教えを踏襲して門弟たちに説いた。事実に基づいて真意を導くという学問方法を継承した青陵は，同時に西欧の考え方に接する機会をもっていた。

幼い頃から「大才子」である桂川甫周や堀本一甫に接し，幾度となく議論を重ねたことによって，青陵は「何ベン何ベンモ対サセテ」，「問ヒツメテ責メツケテ」考える方法を発見していく。さらに甫周周辺の人たちから受けた知的刺激は，荻生徂徠が遠ざけた自然界への法則追究へと青陵を向かわせることになった。徂徠が不可知として遠ざけた「些細ナル詳密ナル」，「造化ノ妙」について，たとえ「推シ窮メヌ事」がたくさんあってもそれを「中ズマシニ」しないで，「ナゼニ六角，ナゼニ四角」かというように自然界の理を追究しようとする姿勢を青陵は示したのである。

「君ガ賢ヲ尊ビ民ヲ愛スルユヘ，是ヲ贔屓ニ思召テ，水旱ヲタラヌト云フ理ハ万々ナキ事也」と天人相関説を否定する青陵の記述を見れば，青陵の中では自然と人事を貫く儒学的世界観が崩れ始めていることが明白である。天を不可知とした荻生徂徠を越えて，青陵が「問ヒツメテ責メツケテ」自然界の理を探り始めたことは，「何派ノ学問」にも属さないといい切る青陵思想にとって重要な意味を含んでいるといえるだろう。海保青陵の思想分析については別稿を用意したいと考えている。

もうひとつ，海保青陵が江戸で得たものは交友のネットワークであった。青陵との交遊が長く続いた僧侶の雲室は，師，宇佐美灊水没後は林家にも学び，市河寛斎や「寛政の五鬼」たちと親交を深めた。青陵は雲室を介して寛斎と懇意になったのかもしれない。また同門で同い年の松江藩士，園山酉山は灊水没後，豊島豊洲に師事し，桂川甫周にも師事したという。これらの人間関係は，灊水門周辺や桂川家周辺のネットワークの重なりを物語っているといえるだろう。また杉田玄白の隣家にて南蘋派の画を教授していた宋紫石は，青陵と親しかった董九如や司馬江漢の師であった。桂川甫周からだけではなく，九如や江漢からも玄白周辺の西欧の情報を青陵が見聞きしていた可能性もある。本稿では，青陵と交遊した江戸の知識人たちを取り上げてきたが，彼らの中には遊学経験のある者も多く，そのネットワークは全国規模へと広がりを見せる。たとえば，青陵は天明9／寛政元（1789）年，35歳の時に初めて京へ上り，伊藤東所の古義堂を訪ねた。その時持参したのは，森禮蔵（源惟良）[110]の紹介状であった。源惟良については先に少し触れたが，刀法を高芙蓉に学んだ京都の篆刻家である。高芙蓉門下には青陵と親交のあった稲毛屋山や中江杜澂が名を連ねているので，彼らが青陵と源惟良の仲介者となった可能性も高いだろう。

政治を司る諸大名たちが公的立場を離れて一人の文化人になることができるような芸苑の世界には，身分や家格から解放された自由な人たちが存在していた。こうした身分や職業，藩を越えていろいろな人たちが集うネットワークの中は，政治と芸苑という公私二つの世界が表裏一体となるような知的空間を形成していたと考えることもできる。公の世界——治国平天下を目指す政治の世界——を論じる儒学界では折衷学派が台頭し，知識人の間には洋学の影響もおよびつつあった。青陵をはじめ洋学への関心を示した「新しいタイプの思想家」たちは，人事と自然を貫く儒学の秩序観を離れ，あるいは伝統的価値観に縛られることなく妄信を排し，現実を客観的に把握しようと試みた人たちであった。そしてこうした物事の考え方は，私の世界——封建的身分秩序や慣習を離れた芸苑の世界——においても一部浸透していたと考えることができる。江戸の詩壇や画壇では，非現実的な空想の世界を描くのではなく，実際の社会を客観的に認識し，それをより写実的に表現しようという風潮が高まっていたことはこれまで考察したとおりである。

海保青陵は，譜代大名青山家，家老の長子として江戸に生まれたが，彼の周りには徂徠学，朱子学，折衷学，蘭学や仏教，中国語など様々な知識を身に付けた人たち——彼らは同時に詩や書画，篆刻など芸苑の世界にも通じていた——が存在していた。多彩な人びと

（110）通称は森禮蔵。生没年不詳。字は顕哉，号は東壑，また渤石と号す。京都の人。学を好み文を能くし，かたわら篆刻を嗜み，高芙蓉に従って刀法を学び，その門に入った。『平安人物志（天明二年版）』（国際日本文化研究センター所蔵），篆刻の項目に「源惟良　字顕哉号渤石　車屋町二条上ル町　森禮蔵」とある。前掲中井「日本印人伝」（前掲中田編，1996年，p.286）を参照。

に囲まれて生まれ育つという生活環境の中で，青陵は様々な知識を見聞，吸収しながら価値の多様性を実感することが可能であった。こうした知的空間の中で，青陵は「蘭説窮理を以テ支那の書を訳」すというように，「何派ノ学問」にとらわれることなく，「一家ノ学」を提唱するに至ったと考えることができる。「角田彦一」は家督を弟に譲り，自分は「文章ヲ業」とするにふさわしい「雅」な姓，「海保」に復して遊歴生活をスタートさせた。彼が御三家のひとつである尾張藩の藩儒という高い社会的地位を捨て，自らの意思で「自由自在ノ身」を選択したことは，幕藩体制という家格や格式を重んじる社会状況を考えた時，やはり特筆すべきことである。そして海保青陵の「自由自在ノ身」の選択は，彼に多様な価値観を教示した江戸の知的空間と決して無関係ではなかったといえるのではないだろうか。

（経済学研究科後期博士課程）